

航西日記

卷之一

山本 徳太郎

全二冊

ル 2  
3086  
1



門 凡 2  
號 3086  
卷 1

青淵漁夫  
靄山樵者

同錄

全部六冊

航

曲

目

記

早稻田大學圖書館  
25.6.16  
藏入

明治四年  
辛未發兌

耐寒同社藏

耐寒同社藏

乘風

山田白雲

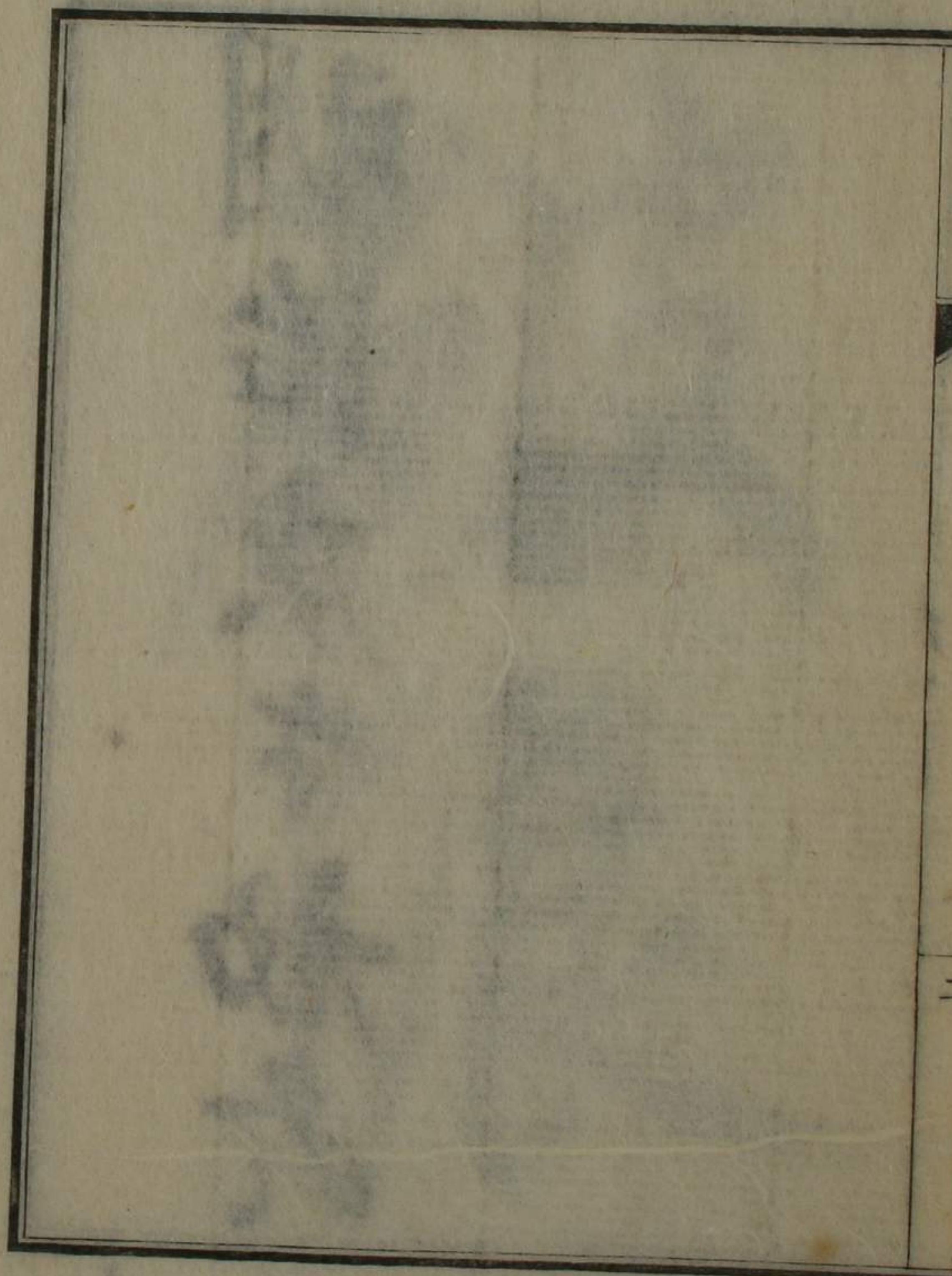
乘風

九百四

破浪

明治庚午初冬





航西日記叙  
慶應丁卯余與靄山杉浦子基從我公使  
使於泰西會法京巴里有博覽會五洲列  
國與法締盟者各差王族貴胄以莅其會  
或其君主有親自來觀者而我公使與焉  
蓋法之此會踵於英昔年之舉而更恢其  
規模洵曠世之偉觀足以震耀他邦也會  
畢公使回歷瑞白荷伊英諸邦靄山有故

途歸余終始從事而其所經歷各有所筆  
累、成冊矣東歸之後同移屋於不二山  
下耕讀之餘對林把臂出往日之記談性  
日之事與夫西邦城邑之壯文物之盛以  
至炎海雪山瀛船錢路風俗景物出於意  
想之外目眩而舌吐者共成一夢境而唯  
此區、冊子足以中於雪泥爪痕也乃有  
合輯纂正之約無幾余辱 徵書靄山亦

先後出山王事鞅掌不能遂前約頃者大  
藏卿伊達公傳聞德惠上梓嗚呼吾濟所  
記特身所歷已耳目不遍語言不通要是  
漆桶若帚安足悉全象而世有未涉其境  
者或因為卧游之資亦不為無益也然則  
慙焉而藏之筐底寧如醜焉而公之世上  
遂與靄山謀公退之餘挑燈纂輯以附副  
劄因思方今法與亭戰兵敗王降當時稱

雄鳴豫震耀他邦之蹟俯仰之間不可復  
觀何其衰之忽諸我讀此書者或有感於  
此事則將有得於此書之外則吾儕所記  
亦將不止於區々卧游之資也  
明治三年庚午冬十月

青淵澁澤榮一識

九例

斯編我儕自聞小供之爲免手録せし私記ふ  
る交際公務と除くの外凡遭際見聞を其真況  
にて途中風漂雨泊郵亭旅館の狀より宮室寺  
觀山水林園の景と略記す其間從容探討せ有  
倉卒經過せしあり故小其景狀を收拾する詳  
略同らば其事實と採摭する疎密齊しあら  
ざる到底所際と所見の寛但小從へばなり  
一帝王謁見の禮典交際此例式に至りては其接  
待の鄭重周旋の真率なる我儕隨後陪與して

之を目撃せしと雖も船をら之を主掌せし小  
 ありて故に其事を叙すや公例に准むる循序  
 及文書贈答此類を聘問往來辭令應酬等の  
 事姑らく之を闕略し附し關係を尋常禮典  
 の大概を録存す所のこ  
 一 航海中正午の測量ハ法國巴黎都府より其の經  
 度と算し上陸場各地の經度英國綠威より筆  
 一 海程ハ航海里法陸程ハ法の里法を用ゆ  
 一 叙事行文の體裁一ならはるる爾時觸景隨筆  
 不より自ら異れる所以にて雅馴を要せず富

麗と務めを惟其景況の天真と存すを主と  
 一 讀者文字ハ兼陋と咎むる勿き  
 一 各國の名地名と記す或漢字或片仮名を以て  
 一 皆傍ふりと加へ人名ハ一と加て之を分つ  
 一 且原語の物名熟字等此類ハ悉く片仮名を以  
 一 て之と記して讀官小便す  
 一 新聞紙ハ一時看過し其紙ハ屬をべき物を  
 一 れども其撮譯と挿記を各ハ其事由の曲折を  
 一 發明す而已ならず歐洲毎事傳播の神速不  
 一 ふと人民論議の根柢ありて概見を履き不

よす之と附載す亦當時の景況と想像オモヒナゲルをる小  
足きり

一博覽會の如き凡網羅臚列カキテせし萬彙マンウイ其品類と  
枚舉カキテする累々カキテ數卷カキテふして足らば而して其壯  
宏の規模カキテ瑰偉カキテ此景象カキテに至りてハ丹青の妙筆  
を情ふも猶其真と描寫カキテし難し況や我儕の庸  
墨陋筆カキテふ於てや故小其會を列せし國名及品  
類部分等の大要と記す而已

一法の一フランダを凡我銀十文目よりして二十  
フランダの。一ナポレオンとを。即我銀三兩一

分小當る。英のポントハ我金四兩二分餘より  
て其二十分一と。一シルリングとを。即我銀十  
三文目五分餘り當る。其他各國の貨幣皆其價  
と異なるそといえども關係カキテなれば之を備カキテふ  
せ矣





新刊  
新刊  
新刊

那破墳  
夜茶會  
佛帝謁見

風船  
劇場  
舞蹈

凱弓  
チエロ宮  
小舞蹈

戰爭圖  
テヤートル  
シヤラ館

ホワテ公園  
アツクリ園  
埋地道

卷之三

競馬  
巴里調練  
魯帝危難

巴里新聞  
病院  
英國新聞

橫濱新聞  
博覽會  
儲水

卷之四

一

博覽會  
褒賞  
セイヌ河  
博覽會  
新聞

獨樂  
手品  
カリナ  
新聞

足技  
ヒカ  
新聞  
雜報

卷之五

那破誕辰  
回歷初途  
瑞西

說法所  
伯尔尼  
ツーン

蓄燕  
日内瓦湖  
メイトロホール

ハロシロウ  
チーユル  
ラヌヌ河

荷蘭  
議事堂  
荷王謁見

アムスト  
ダム  
レイデン  
荷王再謁

新刊  
新刊

二





島を淡靄中に見過し。遠江伊勢志摩など見え  
夜に入らぬ

同十二日西洋二月十六日 曉より北風小て波高し。船動  
揺して過す。午前九時紀伊の大島を右に見る。午  
後一時頃土佐地方に望む。此船の社長なる佛  
蘭西人クレイといふ者篤實小て諸事懇切小取  
扱簡便小て事足る。且相俾曼の人。セイホルトと  
いふ。横濱に在り。事充て。本國へ歸省と  
して。乗組たり。御國の語に通曉し。専ら通辨と  
なり。幸ひ此便利を得たり

郵船中。小て諸賄方の取扱極りて。鄭重なり。凡  
毎朝七時頃乗組は旅客盥漱の済し。ては夕  
ブル餐盤小て茶を吞し。茶中必雪糖を和し  
パン菓子を出し。又豚の塩漬ふとを出し。ブ  
ルと云牛の乳を凝たる。パンへぬりて食せ  
し。味甚美なり。同十時頃小。ハテは朝餐を食  
せし。器械すべて陶皿。銀匙并銀銚庖丁等  
を添へ。菓子密柑葡萄梨子枇杷其他數種盤上  
小羅列し。随意小裁制し。食せし。又葡萄酒へ  
水を和して飲し。魚鳥豚牛牝羊等の肉を煮

熟し或は炙熟し。パンを一食小。二三片。適宜小  
 任そ。食後カツフヘエー。といふ豆を煎したる  
 湯を出し。砂糖。牛乳を和して。之を飲む。頗る胸  
 中爽快小。午後一時頃。又茶を呑し。菓類。塩  
 肉漬物等を出し。大抵朝と同様。又フイヨ  
 ンといふ。獣肉。鶏肉などの煮汁を飲し。パン  
 といふ。熱帯の地。小至れ。氷を水。小和して。吞  
 し。む。夕五時。或は六時頃。夕餐。出。朝餐。小比  
 べ。バ。頗る鄭重。を。凡肉汁。よ。り。て。魚肉の  
 炙。煮。せ。し。各種の料理。と。山海。の。菓。物。及。び。カ。ス

テーラの類。或は糖も。て。製。を。し。氷漿。グラス。ヲ  
 クリーム。を。食。せ。し。む。夜八九時頃。又茶を。點。し  
 出し。朝。よ。り。夜。ま。て。小。食。ハ。二。度。茶。ハ。三。度。凡。常  
 とし。其。食。を。極。め。て。寛。裕。を。旨。と。し。尤。烟。草。ふ  
 じ。吸。ふ。を。禁。ん。總。て。食。事。及。び。茶。小。を。鐘。を。鳴。ら  
 して。其。期。を。報。ん。鳴。鐘。凡。二。度。初。度。ハ。旅。客。を。頭  
 整。し。再。度。ハ。食。盤。小。就。し。し。む。凡。常。と。凡。若。ム  
 ハ。不。食。ハ。疾。病。あ。れ。バ。醫。を。し。て。診。を。し。め。其。症  
 小。随。て。藥。餌。を。加。ふ。此。等。の。微。事。を。載。し。ハ。贅。語  
 な。れ。と。モ。微。密。丁。寧。人。生。を。養。ふ。厚。き。感。ぞ。し。

堪た。因て其畧を茲に小記載せり。

夕方英國郵船の先發して波間小駛行せり。影み

えて夜に入。雨風東小轉。昨日發船より此日

正午まで三百里を航せり。

同十三日西洋二月十七日雨風西小轉。午前十一時土

井ヶ崎向を右手小見て鹿兒島灣薩を過く。名小

し水不海門嶽俗薩摩不も煙霧中に變遷として

時々其一斑を望み行々御國影幽小して見え

ぬ。如く心雄々敷ありなり。いと余波れり。や

らに思はる。

うに思はる。

同十四日西洋二月十八日風烈しく雨細く船の動揺甚

しく折々風潮灑き来りて早板を濕り或は窓よ

り各室小入純て器械を覆ち餐盤小就く者稀

なり。終日室に入て枕藉して皆沈黙を。楊子江

の流末海面小注き黄色渺々たり。此日二百八十

里航せり。

同十五日西洋二月十九日曇曉より楊子江小折る。此江

濁。緑黄色小く廣く。河水湖々。凡四十里許

溯りて左右小分流。右ハ楊子江本流。左ハ

楊子江

吳淞江といひて我淀河小倍其程在是布帆蒲  
席の支那船遠近不出沒也

隨唐佳話小吳都松江鱸魚の膾を献せと云所

謂晋の張翰秋風小尊鱸と思ひし所からむ

流も分岐せる所向ふ岬を砲台の蹟草樹生茂

故壘依然と存せるの清の道光廿二年壬寅年

我天保十三年西洋鴉片の亂小大臣陳化成の戦

死せしも此あたりに坐に感慨の情小

堪たすく浙もハ兩岬楊柳の春老し顔に霞々

村落の見ゆるもいと風情あり漸く帆檣の影林

上海

如く以洲の稠さと認めなをそみて午前十一

時頃砲泊せり少馬して支那人朱塗に魚眼と舳

小畫きたる小艇舫を來りて乗合此旅客は上

陸とすむ其一隻を雇ふて上海港に上陸也此

地支那領なり我横濱より海路十午後三時同所

に設たる英國の旅舎上至英佛其他の人々并小

本地の官人來りて安着と賀し英人御導し江に

傍ひ遊歩するに陪せり江岸を外國人此館舎連

り官邸ふハ其國々の旗を高く掲げ各自便地と

小免たり其間税館西上あり江海北関といふ



漏額と掛け。門々江小面し。浮波戸場ありて。家根  
 と設け。鐵軌敷き。荷物陸揚の便利とす。稅務ハ  
 近年西洋人と雇ひて。掌轄せしめし。事  
 運上の。近年西洋人と雇ひて。掌轄せしめし。事  
 汎濫に遺利なく。舊來の弊を改め。歲入の數元倍  
 獲し。凡一歲五百萬弗。小いたれりといふ。我凡五  
 當る。物産の繁殖とす。東洋天然の寶庫にして。西  
 洋人資つて。外府に流るなるべし。江岬ハ都て。瓦斯  
 燈と。其地中に石炭と。焚き。極と。掛。設け。電線と。鐵線  
 類に。施。越。列。機。駕。見。の。氣。か。と。い。ふ。て。速。施。佳。木。と  
 裁え。道路平坦。小て。稍歐風の一班と視る。夫より

一里許。小して城内に到る。城の周圍を。瓦と。以  
 て。疊。たる。堀。小て。廓。門。と。思。ふ。所。に。兵。器。と。の。鉦  
 類。飾。呈。護。兵。といふ。文字。衣。の。脊。に。印。したる。兵。卒  
 待。め。り。其。邊。より。辻。賣。の。商。人。道。路。小。食。物。器。散。物  
 等。と。鬻。く。市。街。ハ。往。來。れ。道。中。隘。々。各。廓。二。階。造。左  
 れ。と。毛。簷。低。々。門。狭。し。各。種。招。牌。を。掲。げ。或。ハ。往。來  
 の。上。に。横。截。して。掛。し。毛。あ。ま。牛。豕。鷄。鶩。諸。飲。餐。の  
 店。見。世。先。小。て。烹。賣。せ。る。故。各。種。の。臭。氣。混。淆。し。鼻  
 と。穿。ち。路。ハ。石。を。敷。き。並。居。た。れ。と。毛。兩。類。の。捨。水  
 汚。湛。し。乾。く。間。左。し。諸。商。人。駕。舁。巧。者。な。ど。声。々。小

呼て羣集の中と行通ふさま。厭べさ小似たり。古玩書肆。画家ふとに至り見れども。尋常の品たり。りて奇品なし。墨肆曹素功并小查二妙堂に由きて。筆墨など購ひしが。手拭と湯小浸し與へぬ。此ハ顔とぬぐへとの事小て。茶に代るもてなく。ふるべし。外諸店小至れども。烟草の火なく。求むハ太き線香に黠して出とる。居民此富者者ハ多ハ。駕籠小乗り注来れ。貧しきものハ。衣服垢蔽して。臭氣なむもの半小過たり。城隍廟小抵り。城中第一の香火の所と見ゆ。繪馬堂様の所あり。廟前

の泉池小臨し。八橋を架し。池心一介の堂あり。禮拜香花を供する。骸。本邦小異ならず。社内小覗き見と物。突富賣ト。錫笛曲藝などあり。其寂寄料理割烹店等あり。いづれも簷低く。暖簾と掲げ。各客と迎へ。胡牀と借し。飲食と鬻く。賓客此小羣飲合餐を。蓋此日縁日ならむ。城外の市街ハ。寛濶小て。注来道路も廣く。朝々魚市蔬市等立て。鯉鱸鹹塩鯛の類。廣東菜。五升芋。其他の野菜等とならべ。何れも秤目に挂て賣る。鯉鱸ハ三尺許ふゆも見ゆ。其まき江小傍ひて下り。一里餘。新大橋と唱

るあり。橋桁を揚卸して舟行碍なりらしめ。橋錢  
 と取る。是手と兼て。賣る事なり。其より先小。英國。客舎  
 も在り。其裏通不續き。土民の市街軒と並べたり。  
 此處にハ。青樓演劇モありて。弦妓様のもみ見  
 へ。月琴ふじの音も聞へ。雅致あり。此地高官の街  
 衢。注来と兵卒従僕多く引率して。巡邏も。其行装  
 の整ハさる。衣服の粗なる。恰も兒戲ふひこし。此  
 地佛國の教師。支那の風體となり。講堂を開き。教  
 誘する者あり。亦歐人の支那學と研究する為め  
 設し書院も有りて。都て歐人の東洋學と修行そ

る者。皆教法の人ふて。其國の教法比由來する所  
 と推し究め。考證の資とし。且其教を弘めんしせ  
 るよし。其宗旨の積金より。修行の入費と出さる  
 よし。歐人の土人トと使役する。牛馬と驅逐する小  
 異ならず。督呵トする小棍を以て。我曹市中を遊  
 歩するに。土人蟻集して注来を塞ぐ。各雜言して  
 喧しきと。英佛の取締の兵来ると。追拂へハ潮の  
 如く去り少く休めハ忽集る。其陋体厭ふべし。東  
 洋名高き古國ふて。幅員の廣き。人民の多き。土地  
 肥饒産物の殷富なる。歐亞諸洲も國より及ハ

ざる所といへる。然るに喬木の謂はみふて世界  
 開化の期も後れ。獨其國の心を第一とし。尊大自  
 怒の風習あり。道光亦來此。殺戮と啓き。更に開國  
 の規模を立て。唯兵威の歎し難きと異類の測  
 られど。くは。恐は。のまふて。尚旧政に因循し。  
 目も貧弱も陷るや。や思ふ。豈惜まさらむや。此  
 夜鱸魚の鱠などありて。生餐する廣東菜。味殊ふ  
 佳なり。始て水枕を免うれ。陸地の眠を覺ふ。  
 同十六日 西洋二月廿二日 快晴。微暝。頗る春日の想となり。  
 此日交際不係る事故多く。其務も從事に。英佛東

洋は備る軍艦の提督并は。駐任の諸官人來りて。  
 名刺を通し礼問を。本日ハ祝日なれハ。日曜西  
 及び支那人共。幼稚。兒女。衣服など。粧ひ。遊歩踏歌  
 を。まゝ。夜色蒼明。月清く。海面鏡中の如く。眺望甚  
 佳なり。月も乘りて。猶散步を。此日各郷信を寄る  
 同十七日 西洋二月廿一日 北緯三十一度。九分。晴。午時上  
 海を發せ。吳淞江を下り。海口へ出づ。天氣清廓。江  
 中波濤。穏よして。兩岸の眺望。春妍を呈を  
 同十八日 西洋二月廿二日 北緯二十八度。四分。晴。昨の  
 如し。船中釋渙の意をなれ。江河の餘濁。海水を

香港

一 茫渺たる黄浪と蒼波。夕暉は映し錦を布り正  
 一 支那地方を西よ見て甲板上下夕陽を送る。此  
 日二百六十五里を航す  
 同十九日 西洋二月廿三日北緯二十四度晴。なを  
 昨の如し。皆甲板上より散歩。餐盤上より圍碁將  
 碁の戯をちし消光の眩と先。渡舟の地方は添て  
 東風よ泛し帆影の烟霞は暮れいとわろし  
 同廿日 西洋二月廿四日 晴々ふゆ風穏よし朝  
 十時頃 香港より著ぬ 此地英領なり。上海より八百  
 里。通常程四日。此間蘆溝との  
海英二  
 十二度  
 十七分  
 波濤  
 激す  
 季候  
 稍暑  
 此  
 地  
 の  
 廣  
 東  
 府

地先海中に在る一孤島ふして港内羣嶼繞環し  
 風濤を支へ海底深くして多く船舶と可泊せし  
 むるふ足れり平坦の地少く山腰を截て道路を  
 設け海浜ハ支那人の家居多く山手ハ盡く歐人  
 の居なり道光比戦後講和の爲に償金の外割て  
 英國に附屬せし地を往昔ハ荒僻の一漁島を  
 置し由なかり英國に版圖に屬せしより山を開  
 き海を填忽磴道を造り石渠を通し漸人烟稠密  
 貿易繁盛の一富境とハなすしとぞ地圖に據る  
 て考ふれば潮州あたり歎と思はる唐の韓愈は

經魚の文あるも昔時小替まで牢固の巨邦小  
 乗一萬里波濤を枕席とせる其時代の境際懸小  
 異より推せハ世運日新小赴々亦一瞬の間  
 小あつと知る今英人の商業を東洋小擅に利  
 益を得る印度の所領小よるといへとも其便利  
 此道を得て流融暢通運輸自在ならし利柄と  
 掌握し通塞と專断し開合高低變化と計り東洋  
 貨力此權と執る其由る所なきふあらず且土民  
 の保護此為め海陸兵備と嚴小其國の榮名と  
 其利益とを謀る規模の宏大なる所見に就て知

るへし鎮名ハ全權此大任小て威望ある者なり  
 近年此地小大審院を置裁判の貴官を在留せし  
 之東洋小分在を留國民の訴訟を准理審判と  
 いへり山手の人家ハ歐風小暑熱の地を紀ハ  
 水泉茂樹此設け簾幙胡牀此備専ら夏月占涼の  
 為め小結構たり英華書院其他各書院あり造  
 幣局新聞局講堂病院等盡く備る畧歐洲此體と  
 備へて微なる者といふ英華文學上の書籍多く  
 此地小刊行す英人華學を修行するもの皆勉  
 強刻苦固より淺近小あらざる其教法の由来を

船西所請  
卷之二

所を研究するたふ。其學問の源委を考索し其治  
體風俗より歴代に沿革政典律令ハ勿論日用文  
章まで精究し其書を譯し其説を著し大事業を  
遂るも此其人乏しうらむ。文明の素ある人心は  
精神ある學術の上小從事するふと乃國の強盛  
ふして人智の興靈周密なる所を徴する小足  
たり此地は最高巔を太平山といふ。登る凡一里  
余小して巔に旗棹あり國旗を掲げ島嶼の錯置  
風帆の往来望洋に觀遠近一目小在りて眺覽奇  
絶なる山を下り花園を一見を園地土民休暇遊



息をたふ設けたれハ。泉石花卉を陳列雅緻匠意  
と盡し遊覽の際聊客愁を滌ぐへし。○本地より  
限日廣東へ赴く汽船あり凡八時間小到りし。  
又毎週刊行の香港新聞紙あり漢文小て一个年  
分定價四弗あり又香港通用の貨幣あり○歐行  
は旅客此所より藤林藤席團扇或ハ熱帶下と過  
る小用ゆり帽子を買ふて避暑に用意を其他名  
産ハ白檀彫箱象牙細工道紙一種此画楠箱箴細  
工支那絹張傘摺扇等あり支那店小ハ文墨品あ  
れとハ上海小比をたハ價貴し郵船此港にて替

上海小比をたハ

十一

る。船此所泊一晝夜。又ハ二日程の規程ナリ。○都  
 て歐洲小赴ルに。横濱にて取替一銀錢と。此地小  
 て。英貨ポントに取替へ。航海途中入用とそとと  
 よりと花

同廿一日 西洋三月 陰。朝来细雨。此地度数南小移

こを以て暄暎と催一。本邦の暮春小ひと。此地

小設け在る。造幣局と一見一。英國水師提督と尋

問の爲め其軍艦小到る。歸後佛國の岡士来りて

謝を。午後三時。英國此囚獄と見ふ。其壯宏小して。

罪人此取扱りた。そへて軽重小應一。各器局小隨

職業を營一也。且獄中小。說法場と建置き。時々罪  
 人を集ひ。說法と聽りしむ。

此說法といえり。善惡應報此道と説て。勸懲

せしむ。罪人をして。後悔懺解なきしめ。愆て惡

と戒しむ。善小赴りしむ。専ら説たり。其中

小ハ前非と悔ひ。放心と取戻し。遂に本心小立

歸る者ありといふ。其人負を減るを憂ひ。死

刑と恐る。則皇天此意小順ひ。生と愛し。民と

重んず。道懇篤切實なる感ず。小堪た。至

同廿二日 西洋二月 烟雨朦朧たる。交際上此事務



畢りて。郵船小託。各郷信と寄を。旅舎樓上眺望。  
 新緑と催す。横濱より乗来りし船ハ此所まで小  
 て。午前十時比。小艇ふて佛國の郵船ラ船号アンス  
 小乗替る。アルへ一船よりハ二層も大なる船よ  
 て尤清潔ある。午時出帆を。風順よして霎時小支  
 那南陸地方を背ふして航せり。  
 同廿三日 西洋二月廿七日北緯十八度四分 晴。とふ  
 も東北風よて真帆張て。船脚速なり。安南の南陸  
 及び附屬の小島を西南小見て。次第に熱帯下小  
 近く。季候單衣に過ふ。此日二百七十八里を航す

瀾滄江東捕寨

同廿四日 西洋二月廿八日北緯十三度五分 晴。昨夜  
 とも暑甚しく。航を南に移りしを覺ふ。本邦五  
 六月の候よりひと。俄に麻を着し。各甲板上の散  
 歩快く。相集りて。探題次韻なとして。遣興を。此  
 日三百里を航す  
 同廿五日 西洋三月一日北緯十三度五分 晴。暑威弥強土用中の  
 如し。乃是赤道近きなり。午時瀾滄江の入口。燈明  
 臺の林に至る。夕四時比。東捕寨河口へ入て。上流  
 小潮る。此間兩岸緑樹繁茂し。根株水涯に浸し。樹  
 樹尻尾長き。後の羣を遊ぶを見る。川幅本邦墨田

紫棍

川程ふり。往、狭曲（ハカマヅク）のいゝきハ。船尾旋（マヅル）らさむ。橋  
 戻して過ぬ。岸小垂（タタリ）る。木くも手折べき程。もて  
 水底ハ極（タラシ）めて深（コソ）しと見えて。舟行碍（サマシ）りなし。暮六  
 時頃。紫棍の港小着ぬ。（此地安南南隅。瀾江の地。佛  
 國領なり。香港より九百十  
五里。通常程。四日。緯度十度十七分。一在て。此地駐  
 季候。暑熱。土地肥。風俗。支那に似て。陋。此  
 割佛國總督の使者来りて。安着を賀す。此夜星斗  
 燦然。銀漢低（ヒカ）て。叢裡（ツミ）の虫聲秋を報す。季候の變を  
 瞬息の間亦航行の迅速なる。旅客の感を増す  
 同廿六日。西洋三日。晴。朝七時。本地官船の迎より  
 て。陪従して上陸す。碇泊の軍艦祝砲ありて。騎兵

半小隊。馬車前後を護し。鎮台の官邸に抵る。席上  
 奏樂し畢て。其本國の博覽會（モウワンカイ）小模擬（コモギ）せし。奇物珍  
 品を雜集せる所を一見し。市街を遊覽し。午前十  
 時頃。歸船し。夜鎮台の招待（ソウタイ）により。官員會集して。  
 猶奏樂をるを聴く。○是より先。佛國郵便を開く  
 為め。經畫（ケイワ）する事あらむとて。教師を遣し。此地の  
 形勢を測らしめたるを。土人憤怒し。其人を殺害  
 せしより。竟に戦争となす。佛兵大に土兵を攻撃  
 し。内地小深入す。是より因て和議を講し。地を割て  
 罪を謝す。尔來佛國所領となりし由。鎮府在て。重

官を駐め總轄せしめ。三兵の將官。及兵卒凡一万  
 を駐劄せしめ。不虞小備へて盛んに開拓建業の  
 目的をなせ。されとも兵燹の後いまだ十年も  
 充たされハ。土地荒廢し。人烟稀疎。小て全く休養  
 殺富小いさらせ。且土民反覆測り難く動もせれ  
 ば。嘯合在乱し。來敵をるあり。故に佛兵常ニ戒心  
 ありて。兵額を減せり。と云。各國。船舶も僅小  
 四五艘。河泊せりのみ。て。商店も少し。専ら土地  
 を修繕し。既不製鉄所。學校。病院。造船場。等を設け。  
 東洋根據の要領とす。大に他日の遠圖をなせ。

されとも一歳の収税額。僅小三百万フング小過  
 を年々入費多く得失償ひり。さ故。本國議事院  
 の論も區々也と云。○此港東捕寨口より海に  
 半日程。里數六十里なりといへとも。其水底深さ  
 所凡四十五尺許なれば。運轉をるし。碍をなしと  
 云。上陸場ハ平岸なり。船を中流小卸し。小艇小  
 て上る。土俗貧陋。小て。婦女子。男工。小代り。垢面。蓬  
 髪。小て。舟を艫。又。荷物等を運ひて。生活は。熱帯の  
 地ゆへ。沙塵飛揚し。遊歩も懶く。名勝の探るべき  
 佳地もなし。鎮府ハ江濱より。八九丁隔り。一個の

樹林清茂の地は在り。劇場妓院もありて。支那と同風なり。追々歐人移住せるものありて。人員も増せりと云。案内の者を雇ふて。椰林椰子の木檳榔檳榔の木小似てり。蕉芭蕉越越の間を行き。一の曠曠敞敞の地はいさる。象奴象奴遣遣ものを云く二象ふ跨り來て伎藝せんと乞ふ。命して其伎を見る。二象を鞭撻し鞭撻跪坐せしめ。或は突立せしめ。おのれ上下超超乗乗りどして。自在を示し。やがて木立ある所は至り。一合把合把の木を鼻み挂挂て拉拉折折せしめ。我徒乘らむといへば。又撻撻て跪跪りしめ。其後其後趾趾より上りて。其背上は跨跨るふ。亦

自在なて。此辺兩岸をべて。荆棘荆棘のとり樹木茂りて。處々虫の鳴き。田畝田畝よりてハ農夫の熟稻熟稻を獲獲など。時候の異なる感をもへし。田畝ハ米穀二度の作地よて。所謂安南米是なり。東洋諸國へ運搬運搬售賣售賣して利益をなす。金銀貨幣も傳來して。所持するもの多し。○土産。郵船も持來して賣る。蒲葵蒲葵の團扇團扇。箬笠箬笠等なり。又馬車を雇ふて。商輪商輪といふ古市古市に到る。此港より凡二里程もあらず。往昔ハ繁華の地と見えて。巨閣高廊巨閣高廊の頽廢頽廢せしあり。市中一個の大社あり。聖母殿聖母殿と漢字漢字して書せし扁額扁額

掲ぐ。蓋し海神を祀るならむ。石碑。繪額など多く  
挂並へ。兩三の支那人居て祠の縁記様のもれを  
賣る。依て筆話もて猶事由を問へ。了解せざり  
や。答辞なし。○所泊九一夜半日よて發せ。英船  
ハ寄らざる所也

同廿七日 西洋三月三日 晴。午時發。瀾滄江を下り午後  
四時頃。川口なる燈明臺山の禁小至り是より水  
先紫内の者を歸せ。次第小大洋小航せ。船脚速  
なり  
同廿八日 西洋三月四日 北緯六度二十分 晴。暑酷

風様眩ふひと。白瓜を食し。本邦真苦熱を凌ぐ

此日二百四十七里を航す

同廿九日 西洋三月五日 北緯一度四十分 晴。暑風順

なり。朝二個島を右手小見。午時漸く地方近く

航し。午後二時新嘉埠燈明臺を過る。燈明臺ハ海中

の岩上へ造立て堅固なり。夕五時新嘉埠へ着

きぬ。此日二百九十一里を航す

二月朔日 西洋三月六日 晴。朝六時上陸す。柴根より六百

程三麻刺加蘇門答刺とを。左右小して。東洋第一

の海關なり。亞細亞大地より海中へ長蛇のとく

新嘉埠

突出一。北緯一度十七分小在りて暑酷烈といへとも。樹林繁茂の地多く。清蔭快涼をト。且時々驟雨来りて煩熱を瘳く。土地赭沙小。港最寄稼穡の地も見えぞ。雜卉野草。路傍小蔓延。彩禽文羽。其間小嬌柔宛轉せり。土人の風俗。安南と同しく。裸跣のもの多し。市街も亦同様なり。英領小。屬未詳記。埠頭の修營より。石炭の置場。電線の設け。馬車の備へ在て。總て人工を用ひ功績も見えて。英國の志を東洋小逞むる素あるを見ら小足きり。○灣口。恰も園池の如く。島嶼數ヶ環列し。綠樹其

舟田日記  
卷之二

上小葱籠として。園丁意匠を勞し營築せら小似り。汽船此處小至るハ。灣を通し。廣き所に至り。船を回轉し。渡船の便利して。河泊を。浮波戸場小船を着け。橋を架し。上陸を。海岸を。石炭倉のて小。居民力。水小臨みて亭舎數箇あり。蓋歐人の盛夏。遊息の爲め。設けしなるべし。○馬車を雇ひて。市府小至る。港より凡一里余。雜卉汗沼小。泓ひて。徑路あり。府下ハ。歐人土人とも雜居して。諸物を販賣。價極て不廉なり。歐羅巴と号せる。客舎一泊を。此地第一の旅亭也といふ。市外數武小花

花西日記  
卷之二  
十七

園あり。小山を形とり修造し。百卉千草を殖並へ。遠近眺望の趣をなす。園中泉池もありて。炎暑煩襟を清くし。客思鬱懐を慰む。○土産。籐蓆。箬杖。アソペラ。其外又禽。或ハ最小の猿。なと持来り争ひて旅客も高ふ。亦歐洲各種の貨幣を持来り。郵船所泊の間。浮波戸場小風呂敷をしり。其上も開きて。両替を中。小い腰もあり。又古貨幣の雅なり。も見えたり。裸体の小兒小艇も乗り。船側小群り。勸め錢を投けしめ。海中も入て拾ひ来る。銅幣もてハ。水中認りし。とて。銀貨もあらし。花は跳入せ

也。本邦の江島途中杯の如く。人生情態更に異らに其水中も争ふ。龜の子の如く。又海上競渡の真似して其先を争ふ。迅速かりる矢の如し。○此地より。瓜哇抜隊此へ赴く。旅客は上陸して。郵船定日の期限を俟合む。○午後四時。佛國の留士。夫婦ふて来り。送別を。各郷信を認め郵便も届に。同五時發也。  
 同二日。西洋三月七日北緯二度晴。曉来順風。暑氣凌さよ。右手小麻刺加地方と見る。昨日より。旅客増して。船中混雑し。甲板上遊歩も自在ならず。此日百九十九里を航す。

同三日 西洋三月八日北緯五度三十分晴。夕ふも軟風暑氣前日小層に。安南地方をゆき過ぬ。望中一点のものを見に

同四日 西洋三月九日北緯五度五十分晴。昨日より聊

暑を減に。航路熱帯風濤恬寧小して無事。互小

長日を惜之。課を立て。洋學を講せざるを興とを

同五日 西洋三月十日北緯七度八分晴。昨夜蒸氣器

械少損せしり。夜三時頃より航行を止め。洋

中小石泊し。同五時頃整ひぬとて發せ。漸く印度

洋心中に抵り。四顧毫碧も。眸中亦入ものなり。

錫蘭

只波間小飛魚の游跳をみるを見る

同六日 西洋三月十一日北緯六度十分晴。今曉四時

頃器械も之損しぬとて。洋中に投所せり。漸整ひ

風順ふして航せざる甚疾く。西度の石泊の間を償

ふ。

同七日 西洋三月 朝七時比錫蘭島の内ホアント

ッガールへ着きぬ。新嘉埠より千五百

朝餐し。午前十一時上陸せ。オリヤンタルといふ

旅舎小投せ。少馬して。此地の官人來りて安着を

賀せ。此地印度の属島ふて。洋中挺立し。港北緯



六度一分小在て。土地熱帶ニ近ク。終歲氷霜ナク。四時木落を見じ。赤壤沙泥ニシテ。肥沃なり。土民貧瘠支那人トハ。骨相異リ。聊々順良。勉力ノ風あり。蓋々一々歐人小役使セラリ。故リトイフ。其体披髮保跣。腰間僅小更紗木綿モテ掩ふ。色黄黒小て。深目黒齒赤唇ナリ。下民平生烟草を買ひ得ざるものハ。檳榔を齧シテ。吸烟不換。故ニ自ら齒黒シテ鉄漿を銜む。似たり男女とも頭子丸。髻を挿し毛髪を束ぬ。始ハ葡萄牙領ニ在り。在り。荷蘭より攻取り。尔後竟ニ英國の所領トハナ

りて。港口。城門上小。西獅金冠を捧けざる荷蘭の標記。今尚存セリ。港口。岩石あり。潮波激揚。上陸甚難。土人狭小の艇へ。一方小村モテ。檣と一釣合ハセ。一種の舟モテ上陸セ。波戸場木造の小屋ヲテ。直小城門小續ク。門中砲平守衛モ。夫より少。高き所小上りて。市街あり。海岸ハ。石にて砲台を建。砲門を設け。火薬庫モあり。製造古様ニテ。荷蘭領の以。築き。ものと思ふ。海岸西の方。燈明臺あり。鉄造。高き六十フット。といふ。我九曲尺。海門。庶務ハ。クルヌマンエ

元日記 卷之一 十二

伊シユレといへる役りて。掌とる。土地熱帯なれ  
 ハ。亭榭をべて避暑の工夫せし結構なり。産物多  
 一。就中菓物佳品魚類の鮮小て食料頗る芳美な  
 り。椶櫚。芭蕉の實。黄橙。檫櫟。桂枝。甘蔗等良好なり。  
 カレイとて。胡椒を加へざる鶏の黄汁。桂枝の  
 葉を入るものを。亦名物とす。○馬車を雇ひ。三里  
 をり山手小遊小。平岳曲折して。椰林茂り其間  
 小水田小秧を挿むを見る。亦水芋。蓮等青くと  
 得て女山に登り五六丁あり。一个の佛寺小抵る。  
 寺名ホトカイウアといふ。山門あり。門小入れハ。

船山日記  
 卷之十一

十一

十一

正面本堂に鎖して。常小開り。僧小請ふて開り  
 一む。堂内安置せる。釋迦涅槃の像七ヤールトあり。  
 我丈九曲尺二寸磁製あり。全体黄色額ハ白毫カあり。  
 合掌側卧胸より下の衣もて掩ひ。衣鱗状をあり。  
 堂の側。僧房。唐宇。を天堂。地獄の圖を画けり。僧  
 衣の袈裟のよみて。跣足。禿頭眉毛を剃去り。香を  
 奠し。花を供し。合掌。誦經の音。畧禪あり。山の後。即  
 佛骨を收め所をりといえり。三層小築き。石壇を  
 繞りし。中子一樹を栽さり。即菩提樹トあり。外子物  
 あり。又一所子至れり。山頂より。眺望佳絶。小亭を

船山日記

卷之十一

十一

構へ。三鞭酒など備えて驚く。此山上は一螺青山の雲間に見ゆあり。即靈鷲山なりといふ。歸り來り午餐小就と給仕人より此保體黒身下部を布もて掩へるもの。甚く厭ふべく夜小入り。微涼に乗し市中を遊歩に。土人の家屋新嘉埠は畧同。貧陋假雜の景況徴をべし。○島産各色の寶石皆指環へ嵌入して賣る。又泡玉珊瑚真珠亦あり。價製多かれバ漫よ信し。象牙象骨の細工物。椰子烏木蝟毛藤細工。各種木の看本。鼈甲細工。貝類。文彩の小鳥の各種を。旅亭の戸前小持來て。争

新嘉坡日記  
卷之一

ひ勸む。其細工物ハ皆歐人の所用と爲る。爲小製多る也。○貝多羅經の古きハ漆塗金字ふして尋常たり。皆鉄筆して。貝多羅葉に書せしものなり。中央小孔あり。紐もて綴り。其字体梵とも異なり。一流の体にて。蟹行に記せり。○此港ハ三方海よりして僅し。一方築出せし洲崎のよみて。大洋の吹返しを支ゆよ不足されハ。河泊間より強く。船動揺して。甚しきハ器物を破毀をり。至る。加尔信多。孟買麻都羅斯。孟智世利。等へ赴く旅客ハ。此港より。限日の船便ありて。爰は。季

新嘉坡日記  
卷之一

船西日記  
卷之一

侯稍暑。

同八日 西洋三月十三日 晴。朝八時發。暑威昨日より弥

増し。眩暈を計なり。午後一時。洋中鯨魚の數頭

波間小跳躍を看る。本州小鮫ハ南海子産。是ナク尾あり

言の如ふ。其夕三時。驟雨来りて。少島小して。海上。一

團の黝雲起り。忽地空中。驟雨来りて。俄然低回し

波濤小相接し。潮浪を捲揚る。陸地の。驚風の颯揚

を如く。其響ありて。さなるら龍腥を挟む勢ひ

あり。俗子。所謂龍捲たりとて。衆人。奇觀の想をな

せり。

五下

同九日 西洋三月十四日 北緯七度十分。晴。昨雨して。

暑氣稍減。此日二百六十七里を航し。

同十日 西洋三月十五日 北緯八度十分。晴。朝五時。海

馬の波間小浮ふを看る。海馬ハ魚ナリ。正字通

理。細く糸の跳を。俗小馬の腹に燭火を帶り。此日二

百五十五里を航す。

同十一日 西洋三月十六日 北緯九度。晴。始て午餐

小西瓜を食し。味淡し。て甘味少し。此日二百七

十五里を航し。

同十二日 西洋三月十七日 北緯十度。六分。晴。此日二百

航西日記

卷之一

十五

八十四里を航を。

同十三日 西洋三月十五日北緯十七度晴。此日。二百八十二里を航を。

同十四日 西洋三月十九日北緯十一度晴。午前より。亞刺比亞地方の島嶼を過る。夕帆前船を遙より認る。此日二百八十八里を航を。

同十五日 西洋三月二十日北緯十二度二時晴。夕五時紅海を向ふ。時々島嶼出没を。鯨魚洋中よ浮ぶ。

此日二百九十里を航を。

同十六日 西洋三月陰朝六時。亞刺比亞小抵る。此地領なり。

錫蘭より二千三百一十里。通常程十一日。亞刺比亞南緯の一埠小

て。西紅海の入口なり。北緯十二度四十六分。在て。土地積積よて山小樹草なく。地よ潤澤なり。磽

确瘠薄の地なり。人民ハ。即亞刺比亞人種よて。印度よ比を往ハ。強壯小して品格又陋ハ。英の官吏

在留して。管轄を。港口よ二个の砲台あり。歐洲各部の密士も在留セリ。此地開拓の利。産物の益な

しといえとも。東上。西下。航海の便を開き。万里運輸の自在を得れハ。英人の力を盡し。財を費し。不

毛懸絶の瘠地よ也。其國旗を掲げ。管領セるも。

東洋の商業を盛大し。支那、印度の領地を羈縻（ミカド）する規模を見らる。上陸して海岸に在る客舎小入は、馬車乗馬とも、店前小来り勸む。即一車を借ひ市中を看る。海岸の細路、屈曲して、山小傍に半里余にして、漸く磴道小登る。城門、山腰を截。左右石壁聳へて、要所小大砲を備へ歩卒守衛せり。切通しの上十丈許小。橋梁を架し要害の往来とを、道巾僅に兩車を容るゝは、稍下りて、平坦の市街に至る。人家、石室ありと、多し。陋矮にして、茅茨、頽屋、半に過ぎ。人烟、甚蕭條なり。歐人、在

船通詳

雜考

世

水溜

留官負の舎屋に皆海岸の山手小在り。市街を過る。水田場に至る。此地水泉乏しく、雨澤なき時の爲め、闔境の飲料を貯へ、分配を、奇嶂怪巖の間、幽澗深溪を造築し、周圍塗る。小白堊をもてし、舗小青石を以て、其傍磴道盤旋し、石梁を架し、石欄を繞らし、上ハ峯勢聳へ、下ハ潭心深く、茶亭、花園も、其間、小在りて、登臨、勝致、の一個の、仮山水なり。澗底ハ、管を通りて平地に達せしめ、汲取場あり。豕皮子汲て入る。駱駝、又ハ驢小、肩しめて、数里外に送り、各所小分つ。人生、瘠土、生活の難き、飲水

元石日記

卷一

七

也容易ならずさるより人力勉強せざるを得ず肥  
 瘠土地の異る民の苦樂の相反せる想ひ見るへ  
 一肥沃樂地ふ生さ遊惰宴安よ逸一終身人間如  
 斯地あるをあらざる焉呼幸といふへさ欲將不  
 幸といもん欲知は是所謂瘠土の民ハ勤儉よ  
 て勤勁事あれハ戎よ就や輕一即富國強兵の根  
 基なり肥沃の民ハ遊惰よして柔弱事あれハ戎  
 よ就くや難一即亡國逃遁の根柢なり豈あつら  
 さらむや土人羊を牧を業とし肩載多らハ  
 駱駝を用ゆ○土産馱鳥の羽歐洲婦女子の帽同

紅海

卵豹皮木彫七蒲葵の團扇石蠶等なり旅客あれ  
 ハ携来りて之を鬻ぐ但錢を乞ひ價を食ふ甚一  
 上陸の時心を用ゆべ一○此地より蘇士までの  
 海上を紅海と唱へ北ハ亞刺比亞南ハ亞那利加  
 なり海上より皆隱顯出沒せり西地方とも山ハ  
 何きも樹草なく赭色海面よ映一航行勢ひあれ  
 とも風を生ぜず水ハ油の如く漲りて動らぬ熱  
 蒸の氣強く自然海面赤光を帯ふ紅海の名空一  
 りらる就中五六月頃ハ酷烈を極多病者等其候  
 を犯一航をれハ必損をるといふ我儕の航せし

船西日記

船西日記

船西日記

我二月又六月九月子在り。其六月子挂り。暑  
熱聞り如し。困耗疲勞不寐。連夜及へり。牛羊も  
終夜喘をる止を。歐人の此海上を呼て鬼門關と  
唱へ怖る、人を欺り去。夕三時子爰を。此日郵便  
小因て郷書を寄を。

同十七日 西洋三月廿二日北緯十五度。晴朝。並

弗利加洲北邊の島嶼を。西方子見り。此日二百六

十六里を航を。

同十八日 西洋三月廿三日北緯十八度五分。晴。緯度

漸く北子移る。次第暑氣を減を。暑流火

祖暑の候より。此日二百六十八里を航を。

同十九日 西洋三月廿四日北緯二十二度五分。晴。朝よ

り西北風強く起り。船動揺を。同九時頃より猛烈

く怒浪。銀山の如く。甲板上子打揚る。夕五時漸風

る伊太里並船の東洋へ航を。遭ふ。此日二百

六十八里を航を。

同廿日 西洋三月廿五日北緯二十六度三分。晴。昨日

より一層暑を減を。夕四時佛國郵船の東洋子航

をるを見り。並弗利加並刺比亞の地方を。左右子

見り。此日二百五十里を航を。





